

I. 日 時： 平成27年7月28日（火）16:00～18:00

II. 場 所： 公益社団法人 私立大学情報教育協会 事務局会議室

出席者： 神原委員長、片岡委員、藤井委員、花田委員、奥村委員、佐藤委員、岡崎委員、森實アドバイザー

（事務局 井端事務局長、平田職員）

III. 検討事項

事務局から参考資料の説明があり、その後本年度の活動について具体的に検討することを確認し議事進行を行った。具体的な活動については特にフォーラム授業の提案を目的とした。その内容について委員からの案を検討することとした。

はじめに、委員からフォーラム型授業の提案について参考資料の説明が行われ、この提案を基に検討をした。主な内容については以下のとおりである。

1. フォーラム型授業の提案

(1) 厚生労働省の健康施策の実現のためその内容①～④の説明があり、従来の「臓器型」モデルから「全身健康管理型」モデルへの移行が必要であるとした。

- ①健康寿命の延伸と健康格差の縮小
- ②生活習慣病の発症予防と重症化予防の徹底（NCDの予防）
- ③社会生活を営むために必要な健康の維持及び向上
- ④健康を支え、守るための社会環境の整備

(2) 特に「歯・口腔の健康に関する生活習慣の改善」は歯科医師が責任をもって進めていくにあたり、口腔感染症（菌血症）、呼吸器疾患、循環器疾患、咀嚼機能不全および栄養障害がキーワードになる。

(3) 上記実現のためコンピテンシーポリシーを持った教育が必須である。

(4) 一般社会に周知を図り、これに歯科が関与することが目的となる。

(5) フォーラム型授業を進めるため、予算をかけない方法として Web 上で行うことを提案した。リソースビデオによる5～10分の講義を聴く。学生が回答を作成する。

↓

グループディスカッションを1週間以内に行う。

↓

小論文形式による試験を行う。評価を行う。

2. フォーラム型授業に対する検討

以下の通りフォーラム型について以下の通り意見交換を行い、今後の方針を検討した。

- ・ワークショップ（WS）の進め方をどのようにするかが重要。
- ・目的が必要。口腔の関わりが不足している。歯学部からの提案として喪失歯の変化、歯の保存、口腔の維持など歯科医師は何ができ、何を担当するかを明確にするべき。歯ブラシ屋にならないためにはどうするか、など何を目的にするか明確にする必要がある。
- ・学部連携で歯科の担当は何かとの質問を医師から投げかけられている。その対策として口腔ケアを掲げそのプランを計画し患者への対応を行った結果生存率が高まった。ケアには嚥下も含まれると考えられる。
- ・何をやるかが重要である。地域包括とは異なりステージがあると考えられる。
- ・未病の概念が必要。昭和大学での考え方、①口腔ケアは死亡に関与するか、②未病は病気の発症をどの様に防止するか、③健康は未病の防止を行うことが重要。
- ・昭和大学での対応は結果が出ている。WHOの概念をどのように現実化するかが重要。
- ・健康と病気の間未病が存在し、その対処方法が異なることからそのステージ分類をどうするかが必要。
- ・その対応を早く行うことが必須である。老人問題に対する歯科としての役割の具体化を10年以内に実現することが必須である。

- ・回復期の対応を検討する必要がある。歯科の対応が必要となる様な効果について方法論を含め具体化が必要。
- ・フォーラム型の授業による内容がエビデンスに対応しているかが重要である。またそのアウトカムが何を得られたかについて検討が必要。
- ・例として糖尿病などのリスクファクターは何か、その研究が行われ担当診療科で関与されているかなどを明確にしておく必要がある。またエビデンスの評価、学習内容を決定しておく必要がある。従ってこのコースの内容、結果がわからないと意味がない。
- ・一人の患者に対し横断的に診ることができる医師を育てることが重要で、口腔ケアと患者自信の健康を認識する対策、口腔についてもっと国民が考えることを目的にすることが重要である。
- ・「すべての問題は口から始まる」を提示し理解を得ることが目的である。
- ・歯周病は寿命との関連があり全身とのエビデンスがある。したがって口から未病を防止することができることを歯科医師が言わなければならない。これらのフォーラムを学生に提示し勉強をさせる。
- ・口腔が健康に重要である。したがって歯だけの概念を脱却し全身レベルで勉強をさせる。
- ・従来の教授方法では結果的に良くならない。したがって米国の患者中心の医療とアウトカムの研究を学ぶべきである。
- ・多職種との連携をどう授業に結びつけるかが重要である。
- ・将来を予測し研究を行うべきである。患者参加の方向を考慮する。
- ・教員も同時に学ぶことが必要である。つまり新しい科学の確立を中心に先生も学生も一緒という概念が必要で、そのためには、良い教材の作成が重要である。
- ・歯科を打ち出した場合、他職種の理解が得られるかが問題で、今後委員会としても学ぶ必要がある。
- ・スキームの作成を行い国民への理解を行うことが重要。
- ・今後の歯科医療に続く学問の再構築を目指すことが重要である。
- ・未病の判定は歯科では難しい。他職種との連携を図るため共通言語が必要。
例として、口腔内の検査でのデータが無く、数値化が必要である。
- ・今後の課題としてワークショップの開催が必要。
- ・シナリオを作成するにあたり実例を話し合う必要がある。
- ・課題の最終目標は「患者の意識改革と自己管理ができる」である。
- ・治療→予防というパラダイムシフトが必要である。
- ・米国ではエビデンスベースから発展しコストベネフィットを考慮した「価値」に移行している。

以上を考慮して、スキーム、シナリオ作りを次回までに行う。

まずは歯科のスタンスを明確にすることを中心に検討することにし、作成にあたって臨床実地問題を参考にし、これら症例を他職種に広げていくことを確認した。

案は委員2名が各分野におけるシナリオを作成することにした。

その他に、来年度は学会などへの提案や、厚労省へも話題を出していくなど社会に向けて情報発信を行いながら、フォーラム型授業の実現性を検討していくことにした。そのためにまずは、日本歯科医学学会の発表（8月下旬締め切り）に応募することにし、内容等は、委員長が案を作成し、委員会で確認することにした。

3. 次回委員会

今回は、8月27日（木）14：30から開催し、歯学分野における地域医療を題材とした授業の課題及び進め方について、スキームやシナリオを検討する他、日本歯科医学学会への発表応募内容を確認することにした。

以上